

⑰ 桂家庭園（防府市）：新鮮で斬新な作庭の謎

1712年に桂家第四代の桂運平忠晴によって作られた。氏は佐波川の川尻の改修に取り組んだ。この干拓工事により塩田の造成に寄与したのだが、氏は工事が安全に完遂されることを祈願して庭園を作庭。類例のない庭なので少し分析するために、石組みの構成を4種類に分類して考える。

- ① 2石1対の石組みは4組あるが、向かって右側ほど低くなり、右端は1石のみの長方形は何故。
- ② 立石間に1石の伏石が4箇所あるが例外なく右側が低い二段構成の石、突起部は互いに関連性。
- ③ 石の上に石を載せた前代未聞の石組みの意味は何を意味するか（この造形も右側ほど低い）。
- ④ 土堀背後の天神山の借景と当庭の枯山水の関係性は重要な課題（参照⑳龍安寺・㉑久留島家）。



東面の庭園：左隅の2石は接合のままであるが、手前の二石は少し離れている、これは何を意味するか



東庭園と南庭園の角の造形



静寂の庭。土堀背後には神体山の天神山が見え、この地こそ抽象枯山水庭園が出来る条件が整う。

1 造形の意味

- ① 3種類の石組とも例外なく向かって右側が低くなっているのは、右側に向かっている何かを意味
- ② 石の上に石を載せた3組の石の意味は三日月→上弦の月→満月を意味しているのではないか

2 庭園の目的

- ① 塩田開拓のための佐波川の改修工事を安全に完遂する「祈願」の庭
- ② 佐波川から沿って下る気流が霧になって流れる様子を抽象表現しているが、三田尻港で出帆を待つ船が一斉に動く出す様子を描写している。この風こそ北前船の駆動であり、毛利藩の富の源泉だ。

3 借景と枯山水

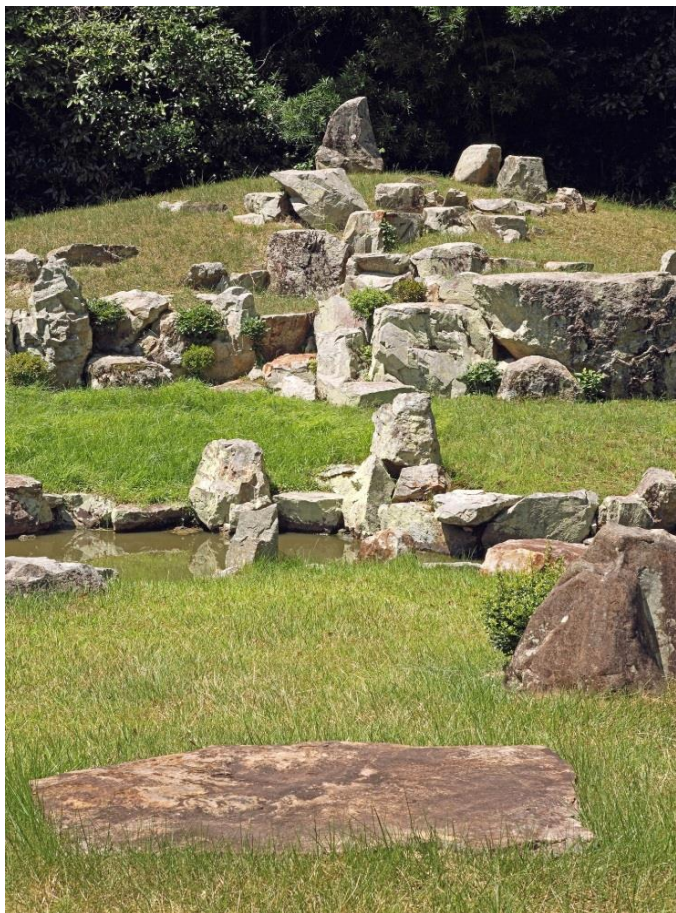
土堀背後の大自然の見える場所だからこそ、その景色と拮抗する人工の美である枯山水庭園が成立する。

⑱ 萬福寺(島根県益田市): 稜線の鋭い石のみで石組み

見どころは二箇所ある。小高い築山に組まれた立体造形の迫力。護岸にある龍門瀑は彫刻のようだ。



荒磯越しに見える石組みは垂直に組まれた龍門瀑



刃のような須弥山と釣り合うような石組の妙



そそり立つ龍門瀑

⑱ 西芳寺(京都市): 禅寺庭園の全ての造形の基準になっている

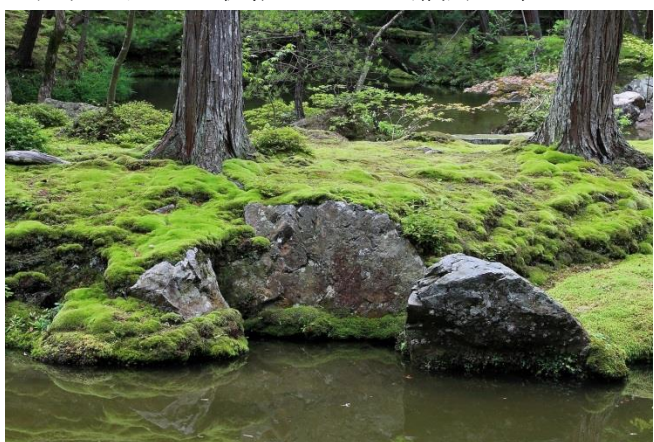
夢窓疎石の作と言われている庭園で上下二段構成である。平地部の池泉庭園は浄土式池泉庭園を禅宗様式に改築した。上段部は枯山庭園で龍門瀑・龍淵水・碑亭跡石組などがある。



金剛池の列石は夜泊石ではなく橋廊の束石



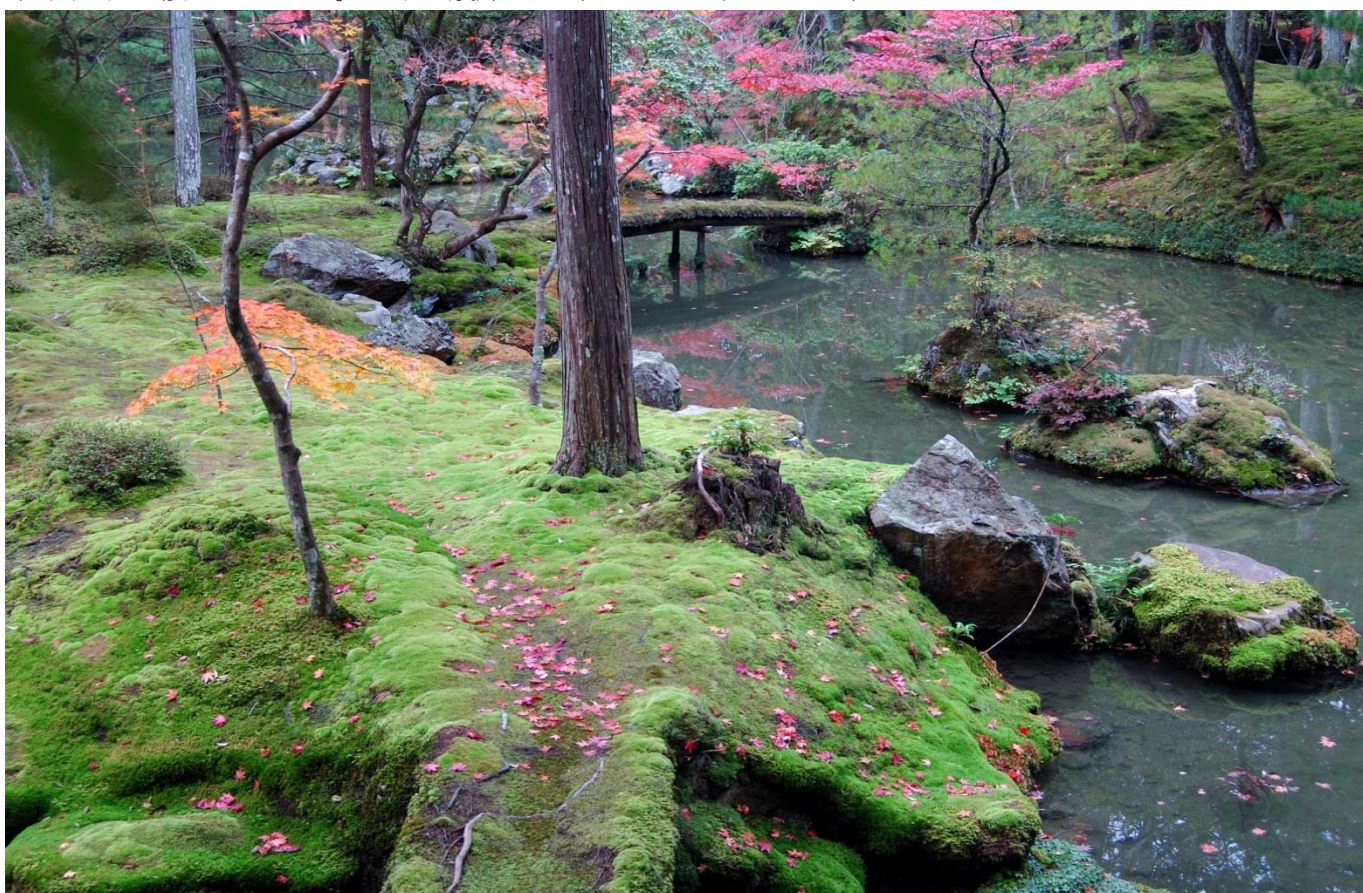
注連縄は松尾の神が祭られていた流れの痕跡



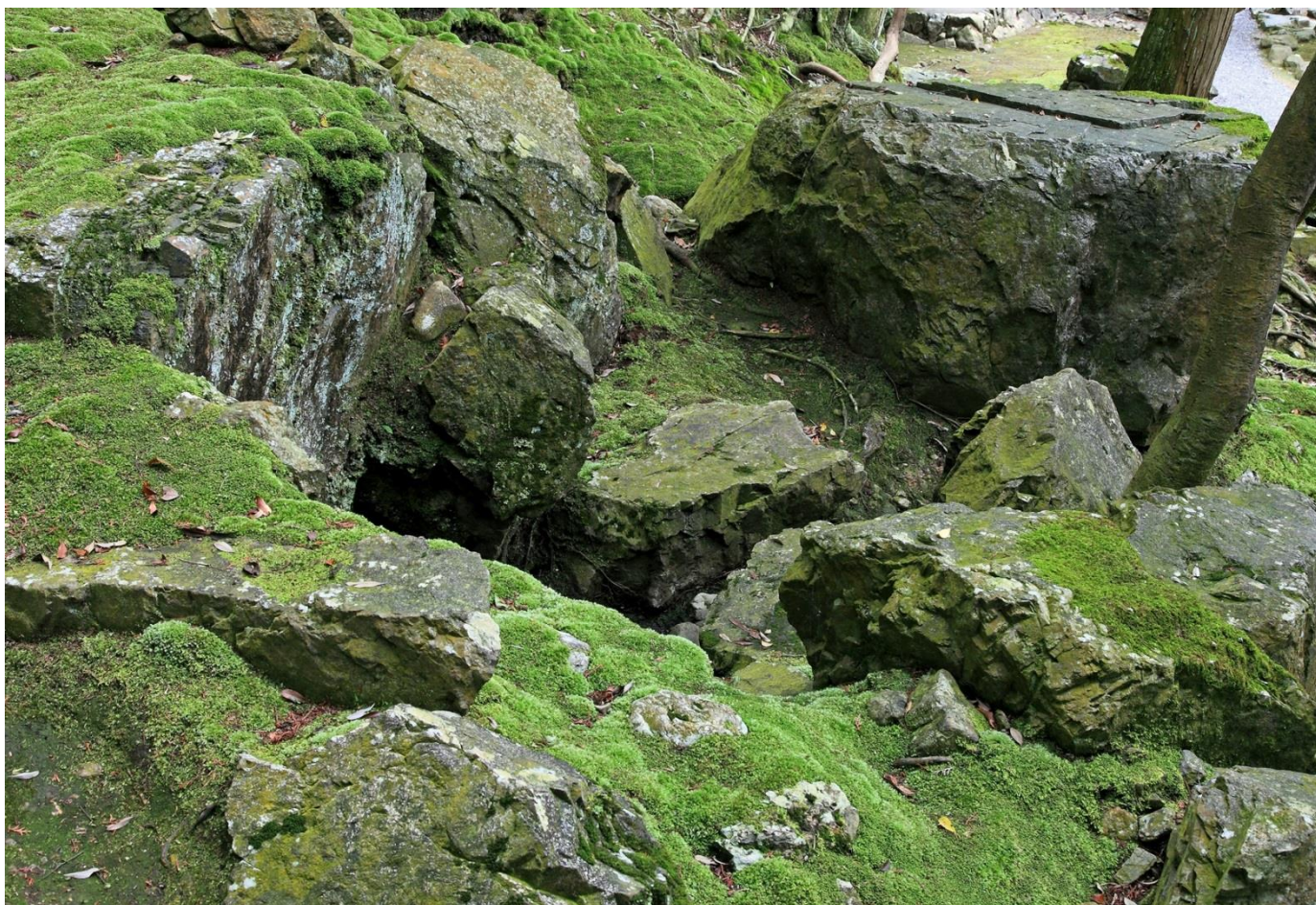
本来白砂に覆われていた。三尊式護岸の基準



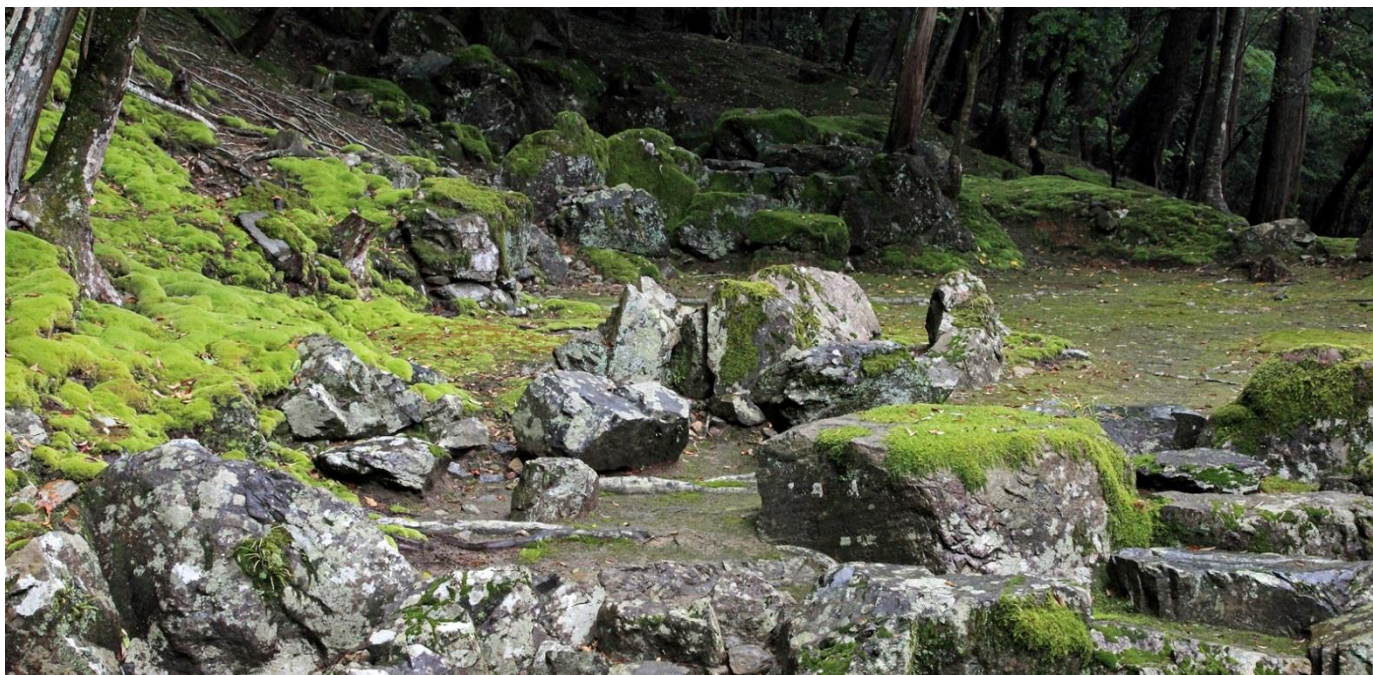
洲浜の基準になる



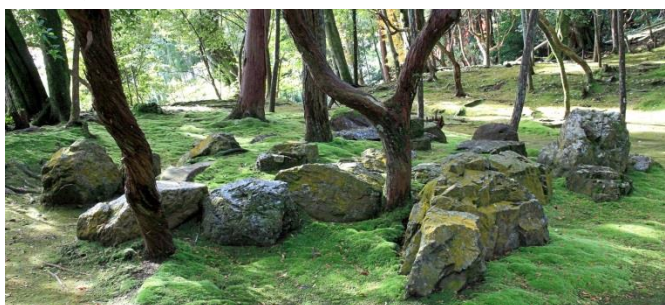
現在、長島は苔に覆われてしまい護岸石組みは見えない。この島は金閣寺の葦原島の原点でもある。



龍淵水:かつては湧き出していた清水は心身を清める場所だ。後世蹲踞の原点である。



龍門瀑の一段目の滝を登った鯉魚は二段目の滝に向かう。なお右側の階段は野座のための修行僧の道



碑亭跡石組と言われる石組は亀島のようにも見える



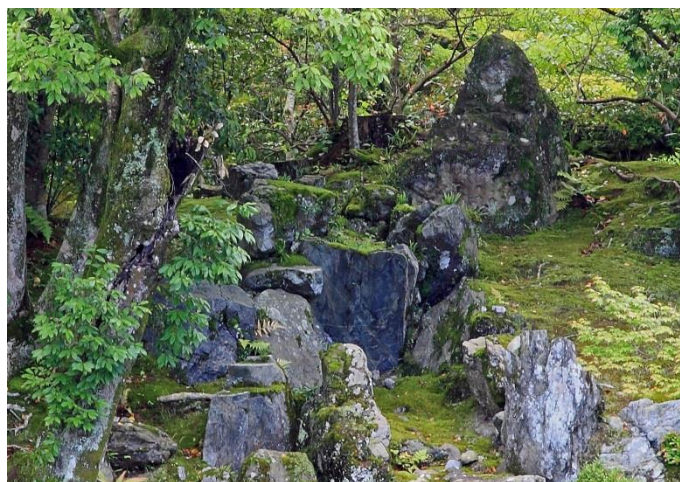
左記写真を45°左回りすると、鬼頭石が三尊石に

⑳ 天龍寺(京都市):後醍醐天皇を弔うために作られた庭

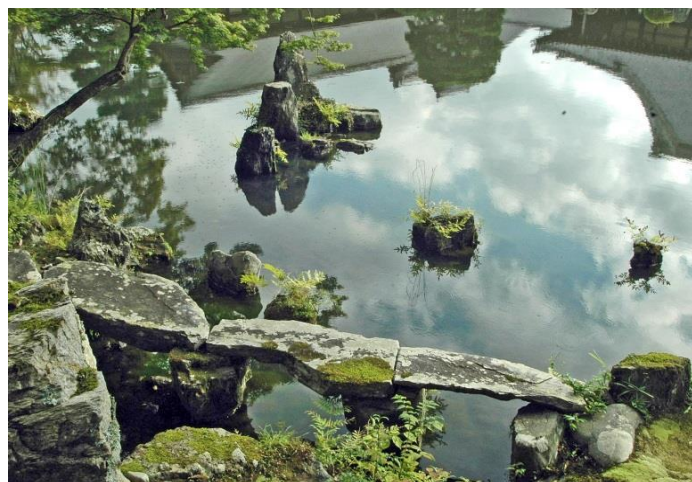
- ①天龍寺以前の禅寺の庭は修行の道場であったが、この庭から以降は鑑賞する庭になった。
- ②龍門瀑は山畔の雛壇状の場所に組まれたため圧倒する石組みは、あたかも水墨画の巖を見るようだ。
- ③当庭の龍門瀑・三橋・碧巖石・荒磯・洲浜・岩島・夜泊石・坐禅石などは後世の庭に深い影響を与えた。



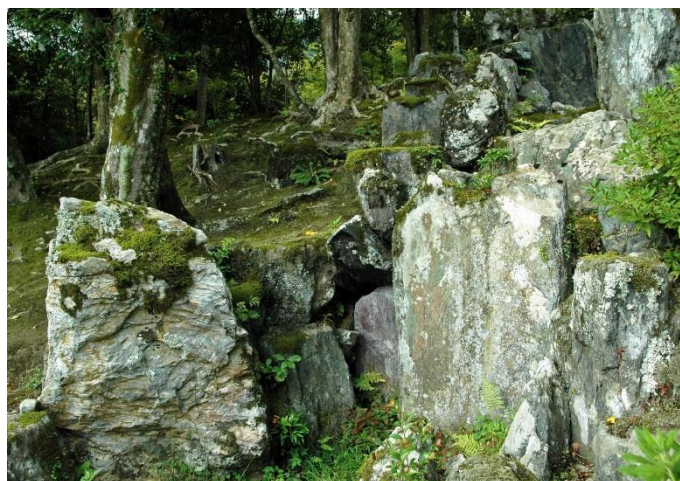
手前の洲浜を見ながら視点を移動すると後の夜泊石が動いて見える。この洲浜により景色に奥行きが出る



最上段の石は観音を象徴、即ち観音の知恵を授かり
鯉魚(後醍醐天皇)は悟りの境地に入る事を象徴



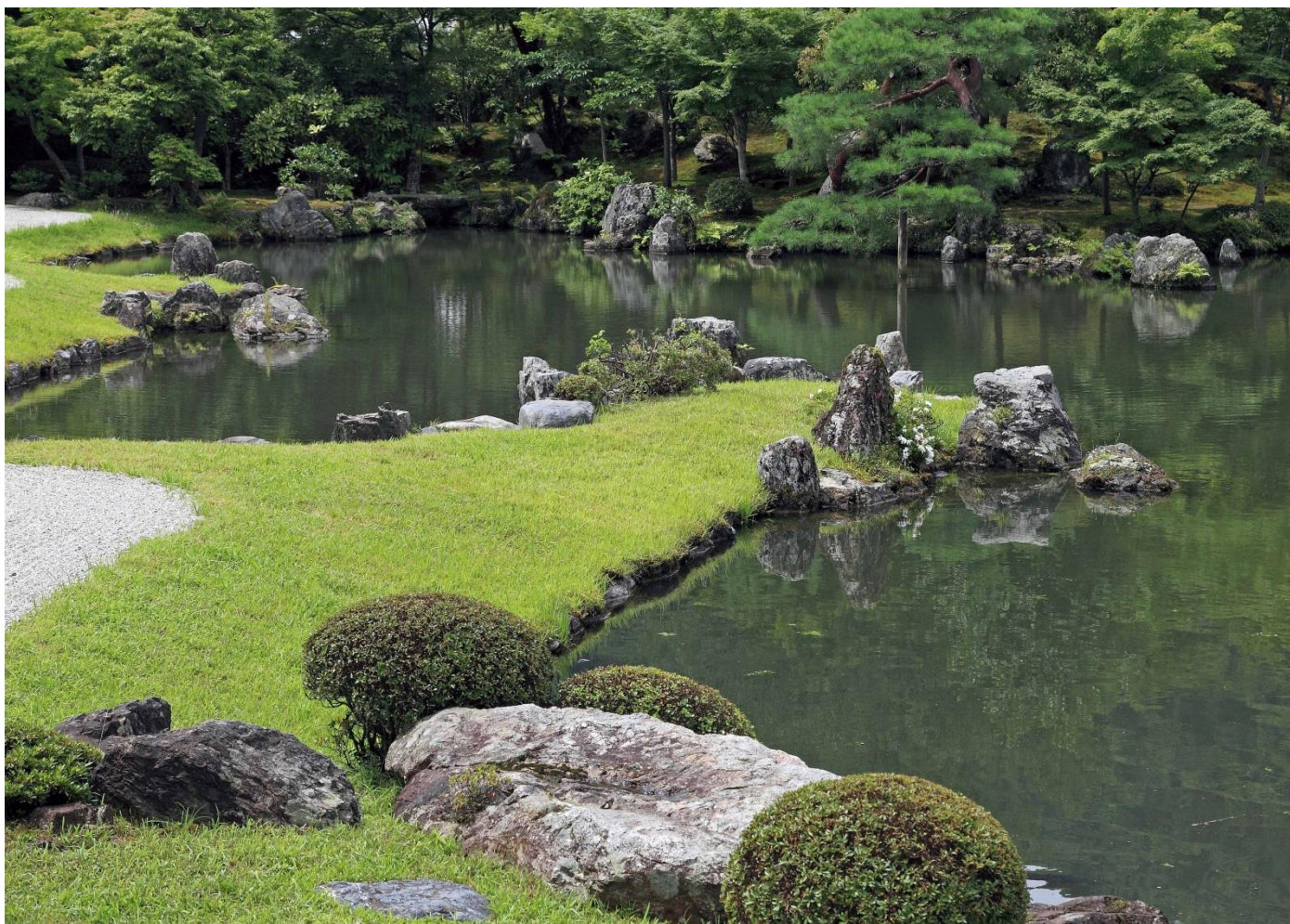
龍門瀑の手前にある三石による石橋は後世の三橋の
基準になる



画面左下の皺の豊かな巨石は碧巖録を象徴



二段目の滝に向かう鯉魚



洲浜は庭園に奥行きを与える



方丈から見て山畔の左側に坐禅石がある

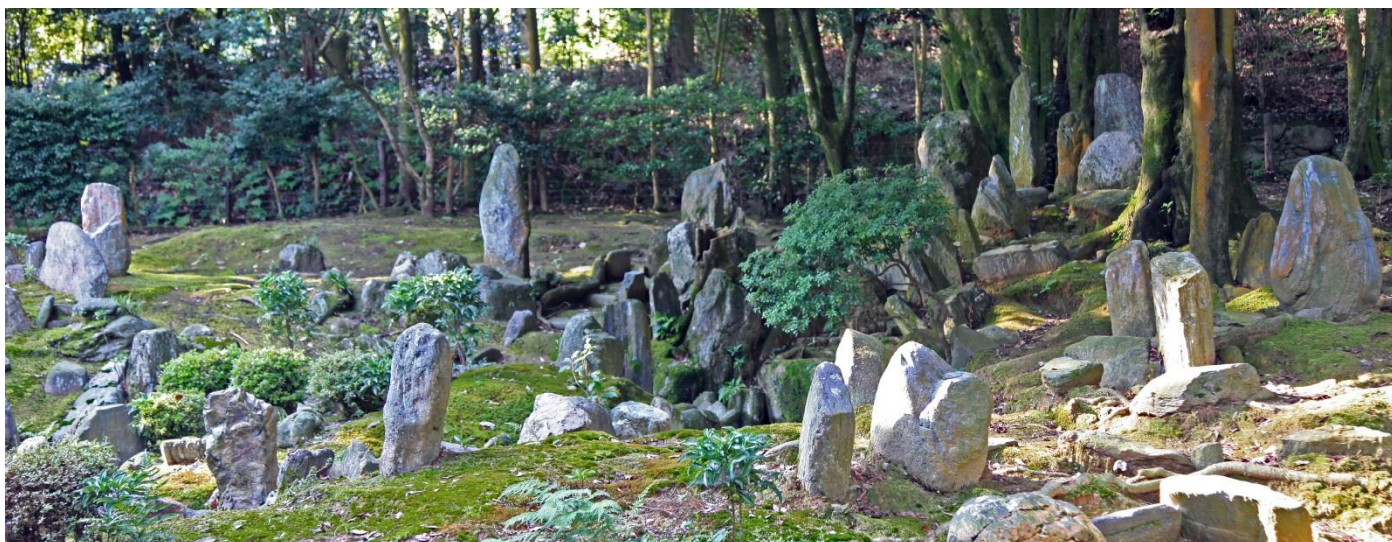


古い様式の庭にある荒磯



臨川寺:夢窓国師の墓である「蓮華石」が開山堂の床下にある。

②1 保国寺(愛媛県西条市):石柱の空間構成美と龍門瀑



横から見た景:石柱群の中にある雛壇状の枯滝に向かって亀島が駆け上がらんばかりに迫っている。



左側にある亀島が枯滝に向かってている景。



龍門瀑中心部拡大:異彩を放つ鋭い稜線の横石がこの庭を龍門瀑の白眉としている。

㊼ 龍安寺(京都市): 抽象枯山水庭園の決定版

① 日本庭園が龍安寺にたどり着くまでの道

1247年に中国の僧の蘭溪道隆が上洛するために円通寺を出て、途中大分県の九重町で滝に出会い「龍門の滝」と命名した。彼は建長寺の創建に当たり規矩を定めたが、その中に『大覚禅師省行文』がある。この内容に影響された夢窓疎石は永保寺・瑞泉寺・西芳寺・天龍寺を創建した。その影響は金閣寺・銀閣寺・保国寺・碧巖寺・常栄寺へと伝わり、ついに龍安寺に至った。

② 次頁以降に借景との関係で解釈をしてみたい。(参照⑰桂家・㊹久留島家)



細川勝元は土堀に見える石清水八幡宮を遥拝するため、木を茂らせぬよう指示したことが伝承されている



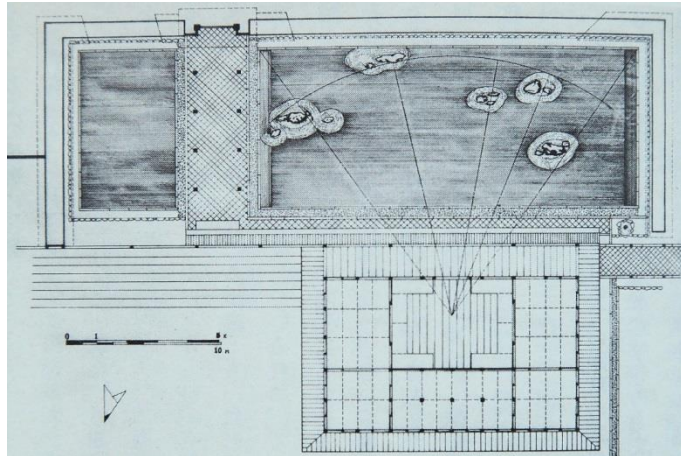
石庭を東側から見る: 創建時に比べて方丈や玄関の建て替えて歩廊の消失、庭園の縮小で随分変更した

龍安寺に関する資料

1 龍安寺の本来の姿と現状(大山平四郎著『龍安寺石庭 七つの謎を解く』淡交社の 49・55 頁より抜粋)

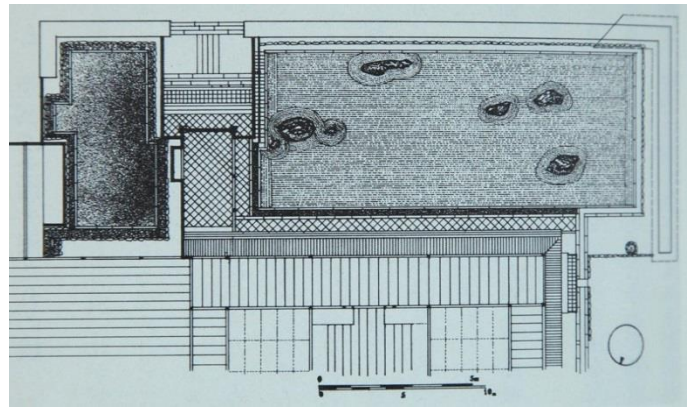
推定復元図

石庭の奥行きは歩廊の東側にある東庭と同じ、玄関は土堀の位置に、歩廊に壁が無い、方丈は現在より一回り小さい、方丈の中心から総ての石組みが見渡せる、遠近法を駆使した石組み。



現状平面図

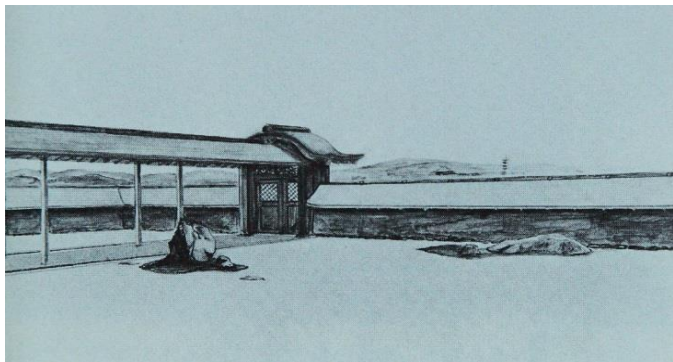
方丈が焼失後大きな方丈が移設されたため、石庭の北側が 1.5m 迫り出した。玄関は方丈と共に移設されたため約 5m も石庭に入り込んだので、壁が作られ東側の見通しが悪くなり、さらに石庭の東側は最大 1 m 狭くなった。



龍安寺消失前の推定スケッチ

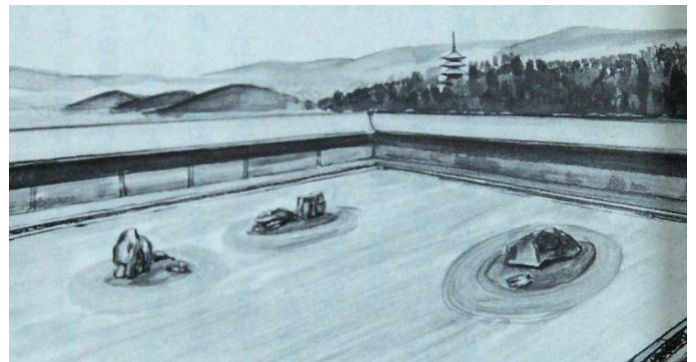
龍安寺は借景あつての抽象庭園であることが、大山平四郎著『龍安寺石庭 七つの謎を解く』淡交社(そのイメージが具体的に 22、45 頁に下記のようなスケッチが記載されている)。

大山平四郎著『龍安寺石庭 七つの謎を解く』淡交社より抜粋



方丈から見た石庭の東側風景

歩廊には壁が無く東庭と土堀越しに東山連峰が見えた。左にある石組群は東山と対照的に厳格に造形した。



方丈から見た石庭の東側風景

南西側の景色は仁和寺の五重の塔が見えたであろう、と推察している。

2 文献上のデーター

寛政 11 年(1799)に刊行された秋里籬島の『都林泉名勝図会』118 頁には細川勝元が書院から毎朝男山八幡宮を遥拝するために庭に木を植えなかったことが伝承されていたことが解る。ところが、石庭が作られてから約 250 年経過した寛政 11 年頃には「古松高く老いて昔の風景匱(そ)となる」と書かれている。つまり昔の風景はまばらにしか見えないと書かれているのである。

また、126 頁には「当山に八景あり、是みな方丈よりの遠景を以て風色とす。(東山仏閣、八幡源廟、伏見城跡、淀川長流、東寺宝塔、花園暮鐘、雲山きゅう松、隣院紅葉)」とあり、方丈から八景が見えたことを具体的な景色が書かれている。

以上のことから、龍安寺は「借景あつての抽象庭園」であることが解る。

2・①秋里籬島著『都林泉名勝図会』下巻 講談社学術文庫 1412

118頁

むかし細川勝元ここに別業をかまえ住せらるゝ時、書院より毎朝男山八幡宮を遥拝せんが為に庭中に樹を植えず。奇岩ばかりにて風光を催す。これを相阿弥の作りしなり。名づけて虎の子渡しといふ。洛北の名庭の第一なり。後年堀の外の古松高く老いて昔の風景儼(そ)となる。その上近年方丈回禄(火事で焼けること)しぬればむかしを情を慕われ侍る。

126頁

龍安寺 の林泉は封境に名池あり、鏡容池と号す。冬日鴛鴦多く集まりて洛北の眺望世に名高し。池中に三つの島あり、中の島を伏虎といふ。また水別石というあり、霖雨の時この石上へ水越ぬれば西の方の樋を上げて水を落とすなり。三笑橋というは東の方にあり。当山に八景あり、是みな方丈よりの遠景を以て風色とす。(東山仏閣、八幡源廟、伏見城跡、淀川長流、東寺宝塔、花園暮鐘、雲山きゅう松、隣院紅葉)いわゆる方丈の庭は相阿弥の作にして、洛北の名庭の第一とす。庭中に樹木一株もなく、海面の体相にして、中に奇岩十種ありて島嶼になぞれへ、真の風流にして他に比類なし。これ世に虎の子渡しといふ。そもそもこの地は文明年中(1469～87)細川右京大夫勝本の別荘なり。この人書院に坐(いながら)にして遥かに八幡の神廟を毎事拝せんがために、庭中に樹木を植えさせずとなん。初めはこの地後徳大寺左大臣実能公述別業なり。同じく公有公の代細川勝元譲られしなり。

2・②岡本太郎氏の借景に関する見解を以下の著書から引用する

『伝統との対決』 岡本太郎著 ちくま学芸文庫 からの「岡本太郎語録」

「借景式の庭園」(146～148P)

雄大な自然を前にひかえて、箱庭的な自然の模写を重複して作るということは、せっかくの自然の眺めをぶちこわしこそすれ、これは全く意味がない。…大自然にまともにぶつかり、受けとめ、しかし、豊かにそれを生かしてゆく、自然美自体に創造的に参画するという技術が、どうしても必要になります。…

大自然の景観をまっこうから受け入れる。しかしそれを受けとめるために、何かしなければならなかったら、小細工をやめて、単純で強靱な手をうつ以外にありません。人間における抽象性、その明快さと単純さこそ大きな自然に対抗して、しかもそれを生かすことのできる形式なのです。

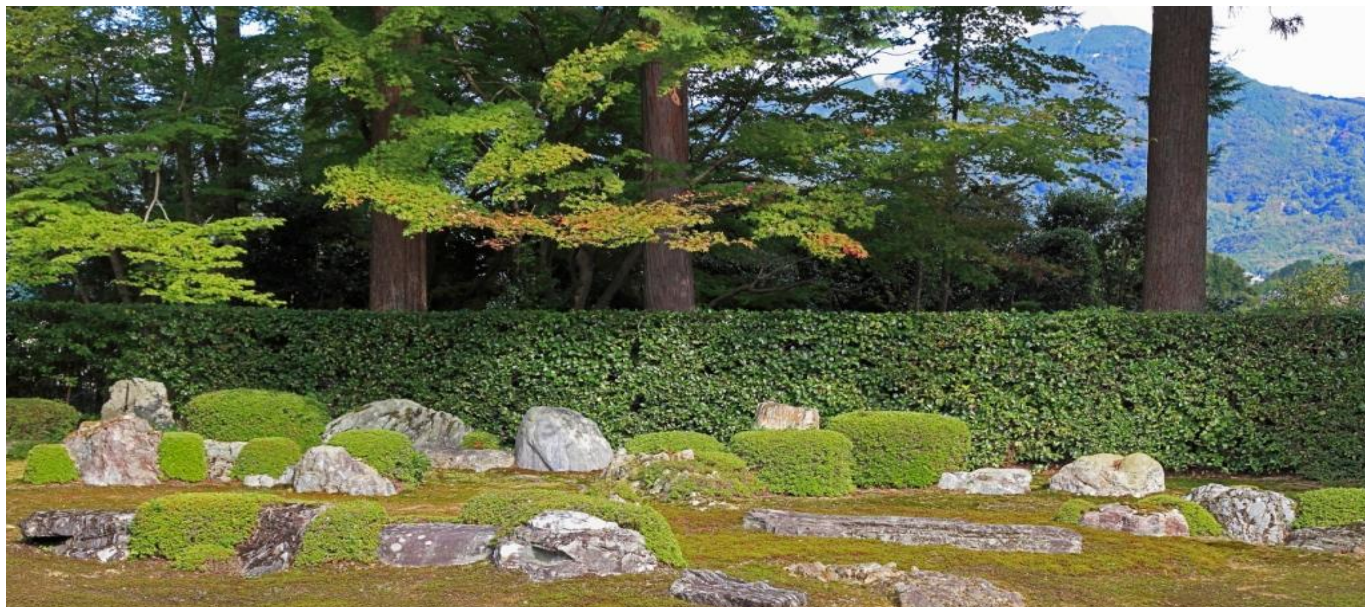
借景式の庭園というきわめて特異な、しかし驚嘆すべき技術は、繰り返して言いますが、おのおのの小さい場所に箱庭的な模写自然をつくりあげるのではなく、大自然そのままをこちらに引き込んでしまうのです。手前のわずかな仕掛けによって、遠い大自然が強引に引き寄せられ、小さいスペースにはまってしまう。と同時にまた、せまい人工のアレンジメントは広大な自然に溶け込んで、ひょうぼうとした広がりや気韻をただよわせはじめます。

つまり、大空間と小空間をギリギリまで異質として対立させる。その張りつめた関係は異質であればあるほど強力にはたらきあって、一つのありふれた平凡な自然空間を新鮮で驚異的な、芸術的空間におきかえてしまうのです。ところでその媒介となっているのは、二つの異質の空間のあいだにおかれた、空の部分です。

さきほど私が本当の借景式というのは、身ぢかにある庭と遠景のあいだが、断絶しているのが条件だと言ったのはその意味です。たとえば平原であったり、谷間であったり、あるいは低い土塀とか垣によって切りとられる。これが借景のもっとも重要なポイントです。

二つの対立的な空間のあいだを、自然に連続させる森や山つづきなどがあつたのではぶちこわしです。それらはまったく不必要な邪魔者になって、異質な対決を失わせ、すべてを素朴で無感動なままの自然に戻してしまうからです。

3 借景庭園の例(古庭園・重森庭園):庭園と背後の自然風景の関係性



円通寺と比叡山(本来は生垣背後の雑木林はなかったが、最近では新たなマンションを隠す為に茂らせた)



小倉家(岡山県吉備中央町)重森:昭和 26 年(55 歳)
造形性の強い庭であるが、焼き板の板塀により背後の自然と混交することなく、互いの美しさを高めた。



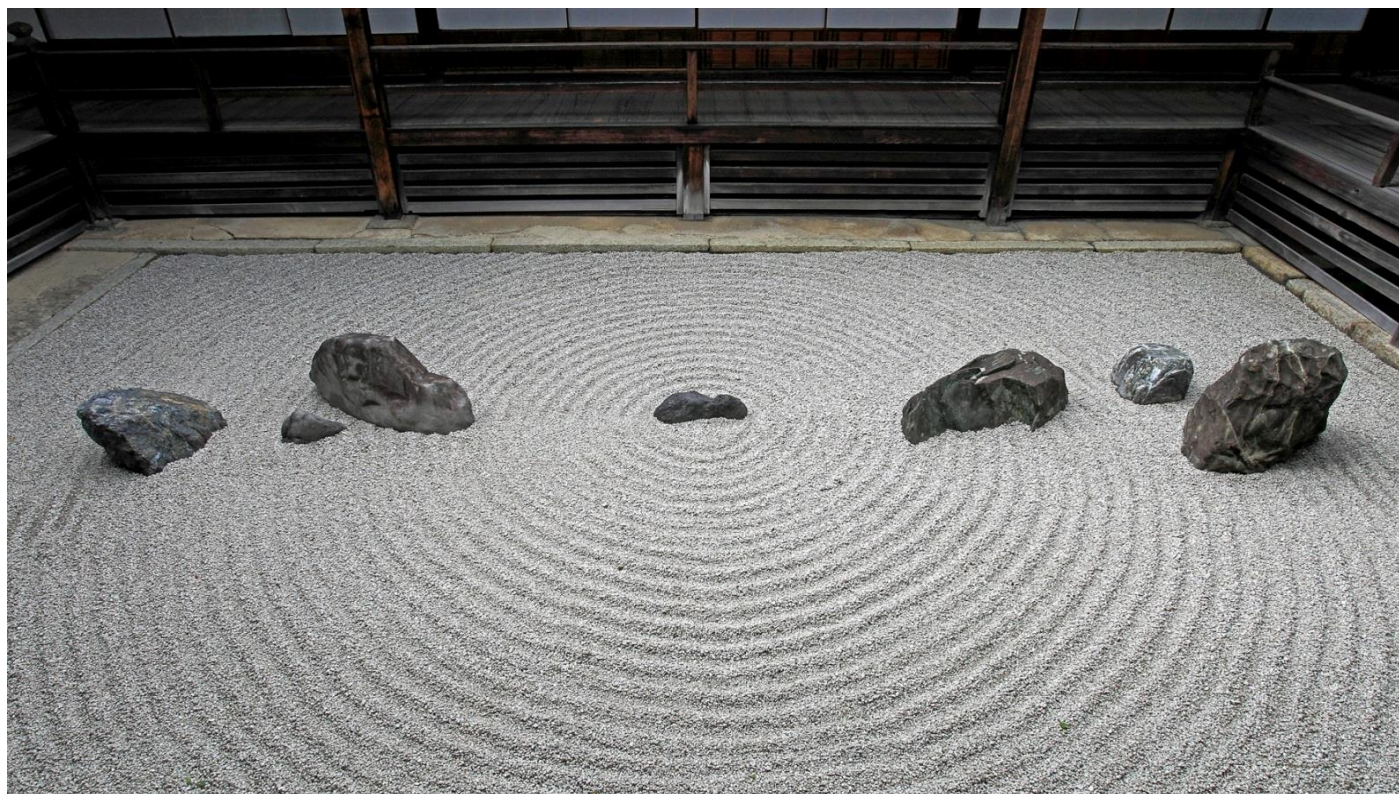
織田家(愛媛県西条市)重森三玲:昭 32(61 歳)
単なる借景庭園ではなく、背後の石鎚連山を象徴した巨石による石組み。



興禅寺(長野県木曽町)重森三玲:昭和 38 年(67 歳):大自然の造形美に人工の庭園が拮抗するためには、自然を超えた人間の抽象的造形である枯山水庭園が必要となる(自然のミニチュアとも云える築山や山・川・橋などの池泉庭園では貧弱な造形になる)。

②③ 東海庵(京都市):三か所の庭。特に「東海一連の庭」はポスト龍安寺の頂点に立つ庭

寺は1484年に妙心寺6世・雪江禅師が悟溪宗頓に開設させた。以後妙心寺四派の一院として重きをなしている。庭は1814年に紀州田辺の海蔵寺15世東睦宗補(とうぼくそうほ)によって作られた。



「東海一連の庭」は枯山水庭園が如何に感銘を与えるのかが理解できる。



棗形の手水鉢



書院西庭:三尊枯滝が印象的



冬景色は総ての音を吸い込むかのように静寂

②④ 龍源院(京都市): 古庭園と現代枯山水庭園の白眉



方丈東庭 東滴壺 昭和 35 年に鍋島岳生の作品 僅か 5 坪の庭であるが一滴の水玉が無限に広がる



同上: 緊張と静寂



方丈北側にある「龍吟庭」



滹沱底 (こだてい)

㊥ 福田寺(滋賀県米原市): 要の配石のみで構成される空間構成美の庭

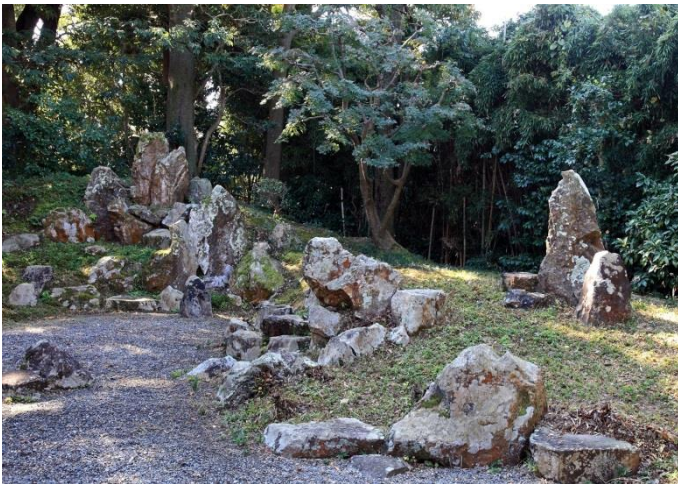
①庭はむだな布石を一切取り去って、しかも必要な石だけを要所に配置しているため、心憎いばかりの素晴らしい空間構成を示している。

②水墨画由来の石の選択: オーバーハングの石の役割 (参照㊥常栄寺にも同様の石がある)。

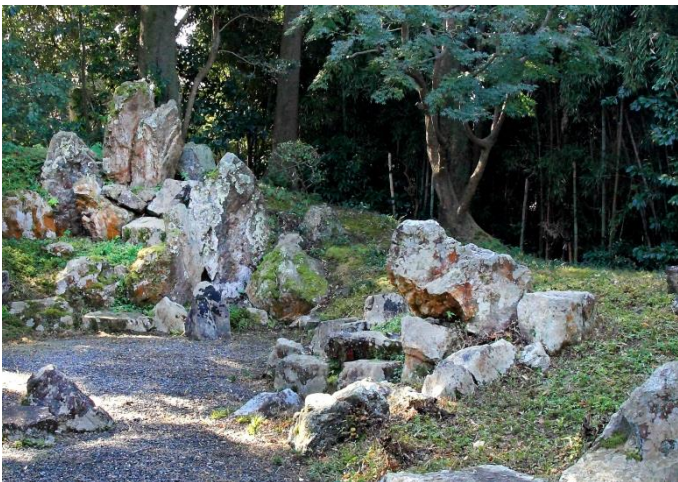
③逆遠近法による枯滝の迫力: 手前の石は丸みを帯びた低い石→出島上に個性ある石→築山上に石魁



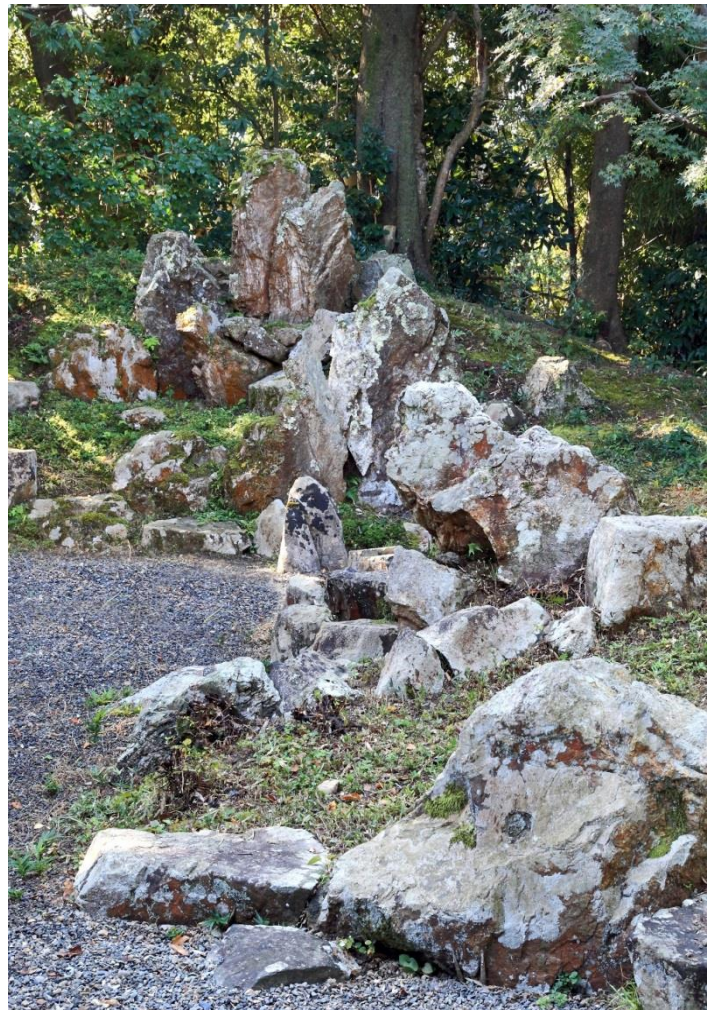
メインの石組は三か所であるが、左右の出島上の造形や奥の築山上の造形が全体的に醸し出す空間美



右出島上の石組と築山上の枯滝



ライオン状の岩は水墨画の中景にある巖の象徴



ライオンのような岩はまさに水墨画の中景のようだ

㊼ 金地院:これぞ小堀遠州！ 斬新な幾何学模様

最近復元された庭園の復元背景・根拠・問題点(白砂・遥拝石・立体造形性)を記す。



復元前:鶴島・亀島・蓬莱山の前面が苔に覆われていて、それらの造形が不鮮明

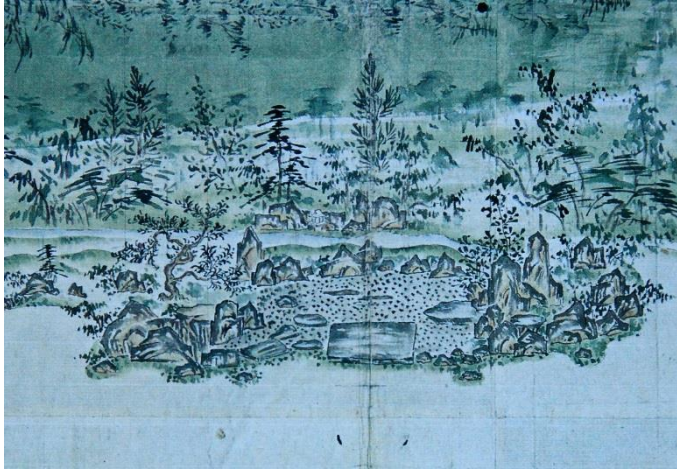


復元後:海洋に浮かぶ神仙島の鶴島・亀島・蓬莱山周辺の苔を除去すると、小堀遠州の造形が明瞭に

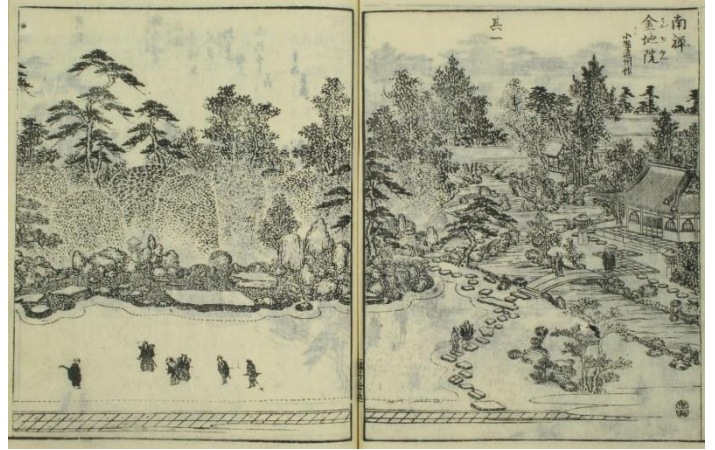


蓬莱山前方の復元後:亀島・実質上の遥拝石:富士石(小堀遠州のサイン)・造形上の遥拝石・鶴首石

復元の根拠



『金地院境内指図』寛永 5 年(1628 年)を参考に。



『都林泉名勝図会』寛政 11 年(1799 年)を参考に。



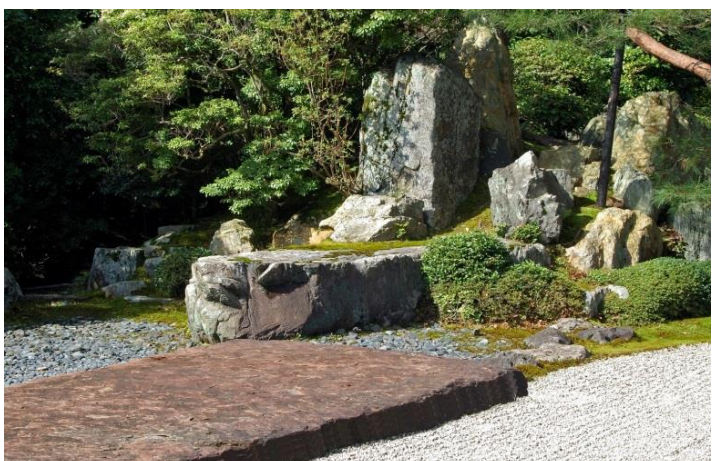
方丈屋根の吹き替え時に庭園の俯瞰写真を撮影。
左側にある長方形の石に違和感を覚えました。



Googleearth により上記長方形の石の方向を延長すると、背後にある東照宮の位牌の位置に一致した。つまり鶴島と亀島の中央にある通称「遥拝石」と言われている石は造形上・名目上の役割が大きいですが、実際に東照宮を遥拝するには、亀頭石の先にある石が遥拝石と云えることが解った。



鶴島側から遥拝石と亀島を望む：遥拝石右側は栗石のため遥拝石の露出は約 20 c m あるが、白砂側は 5～10 c m である。その原因は白砂の粉化に伴う白砂の入れ替え作業時に嵩が増したと思う。



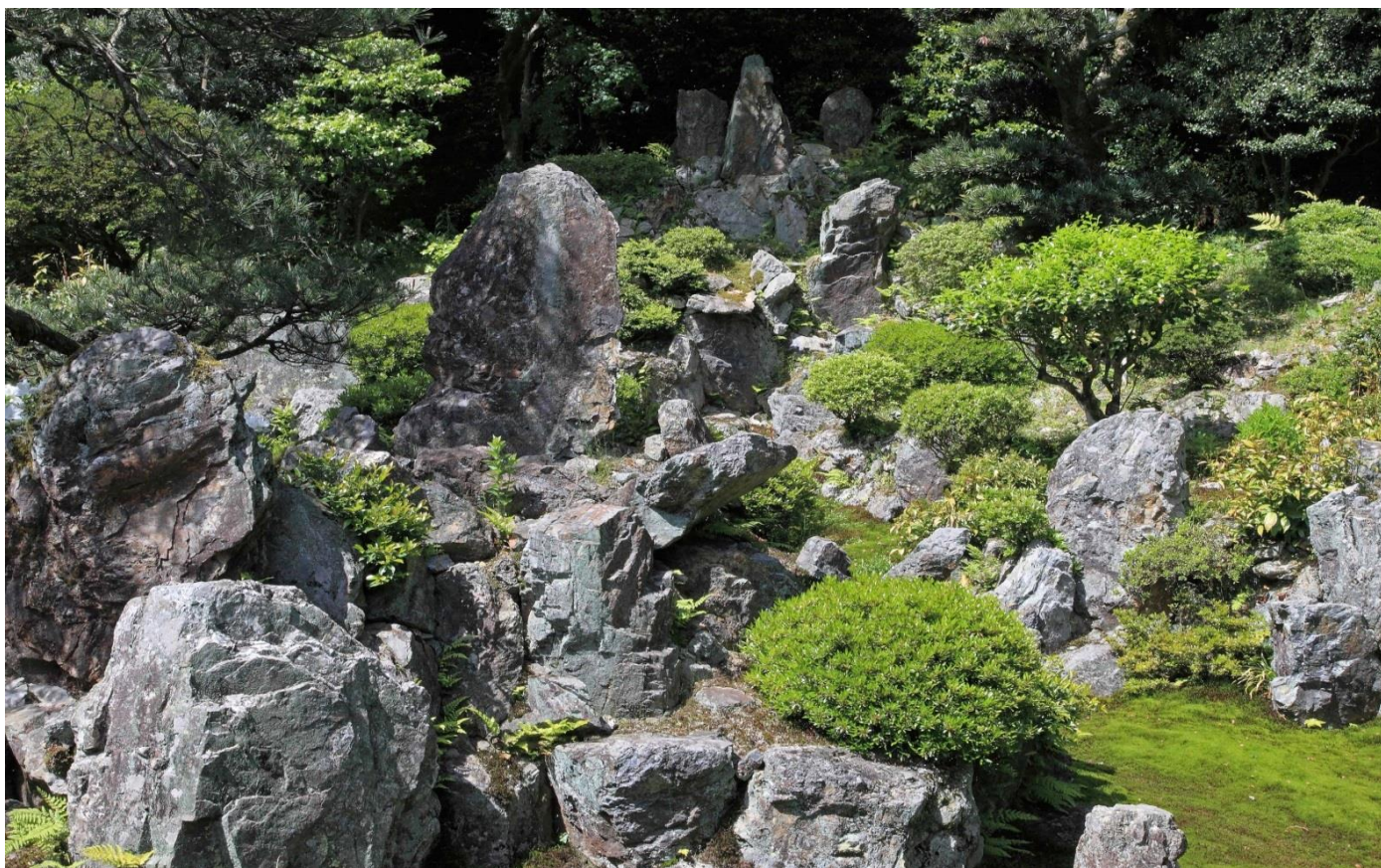
PC シミュレーションにより遥拝石の高さを高くした。これぞ小堀遠州の幾何学造形の復元だ。

現時点では白砂の嵩を下げ、遥拝石の造形上の役割の復元はされていないので、仮想復元した。

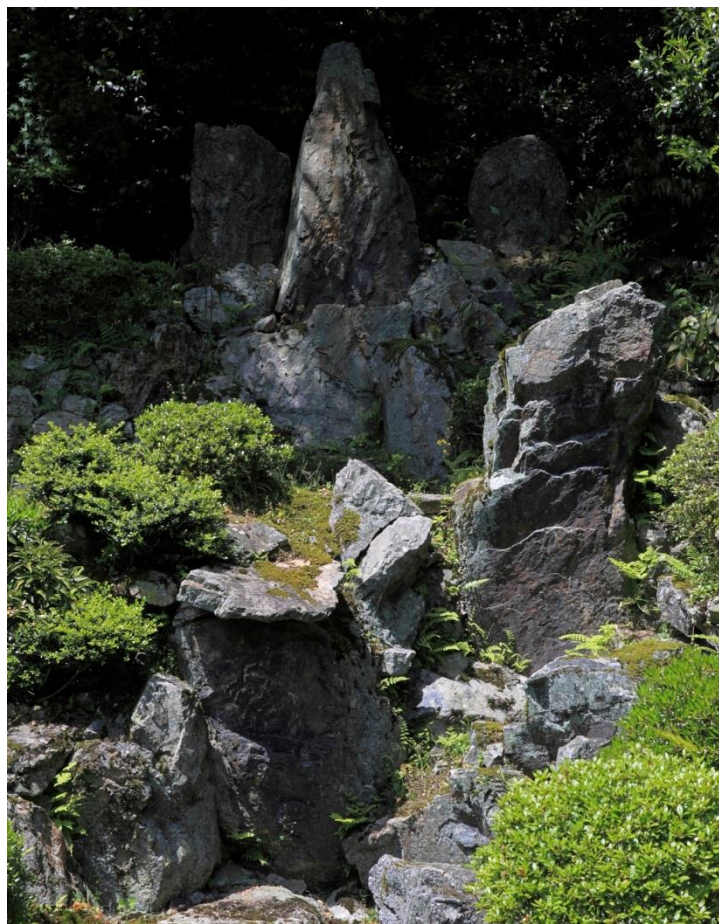
(白砂の粉化に伴う白砂の入れ替え作業時には旧白砂の廃棄と新白砂の投入のバランスを図る)

②⑦ 青岸寺(滋賀県米原市): 青岸寺庭石の特徴は、凹凸の激しい立石を好んで用いる

ことに不動の滝の石は表面が荒々しく褶曲して、しかも全体が弓なりに反っている。この枯滝組の造形は目もあやにちりばめられた手練の石組みは、天才的な手腕の持ち主としか言いようがない。



手前の蓬莱島には鶴島・亀島・蓬莱山があり、奥には三尊枯滝と不動の滝がある奥行き深い庭だ。



ダイナミックな三尊枯滝と不動の滝の造形だ



最深部の三尊像は山畔部を更に土盛りされた



現在彦根城にある楽々園は青岸寺にあった庭

②-1 阿波国分寺: 当庭園は各種の要素を含んでいるが、独創的造形の原点を述べる

①イサム・ノグチと重森が影響を受けた。②水墨画の影響が濃い。



須弥山石組み: 稜線の鋭い青石(緑泥片岩)が乱舞する造形は日本庭園ならではの美しさ。

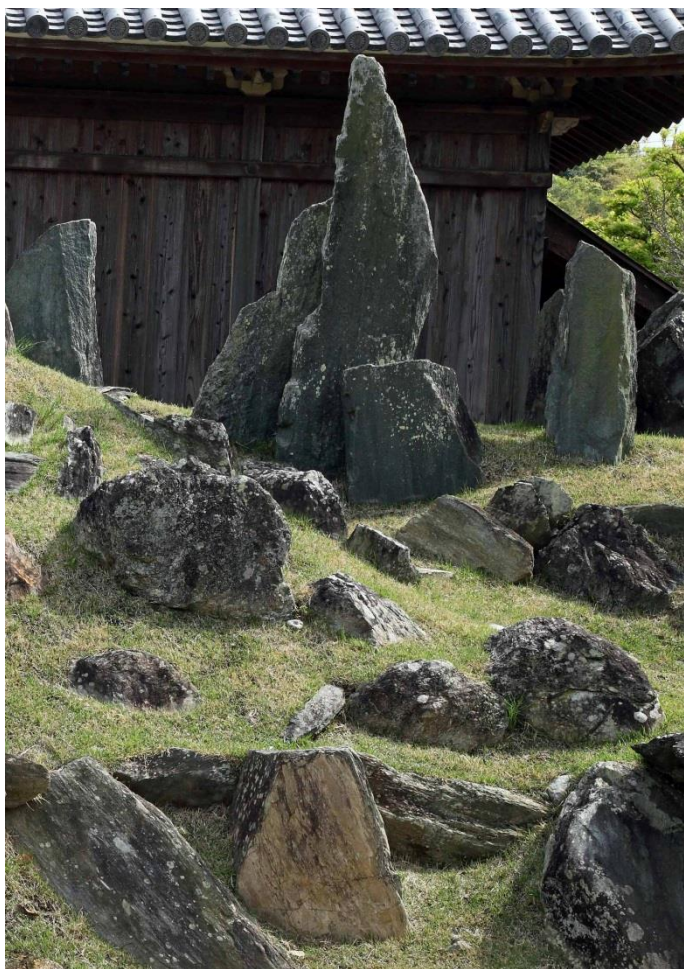


重森に案内されたイサム・ノグチと須弥山



イサム・ノグチのユネスコ庭園の主モニュメントに結実

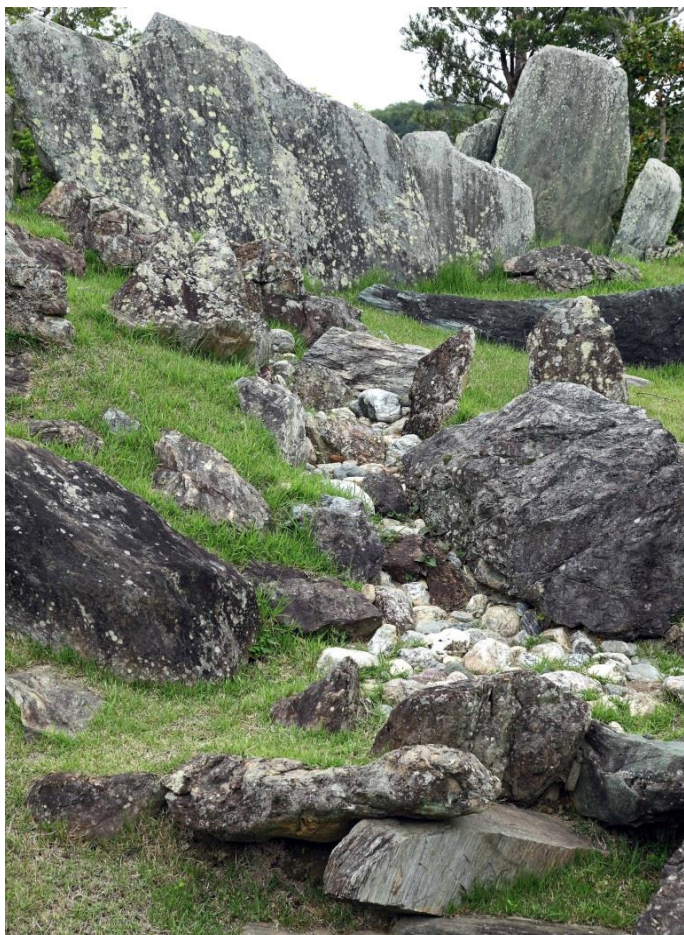
㊫-2 阿波国分寺:水墨画のテーマを庭園に写し変えた(参照㊫福田寺)



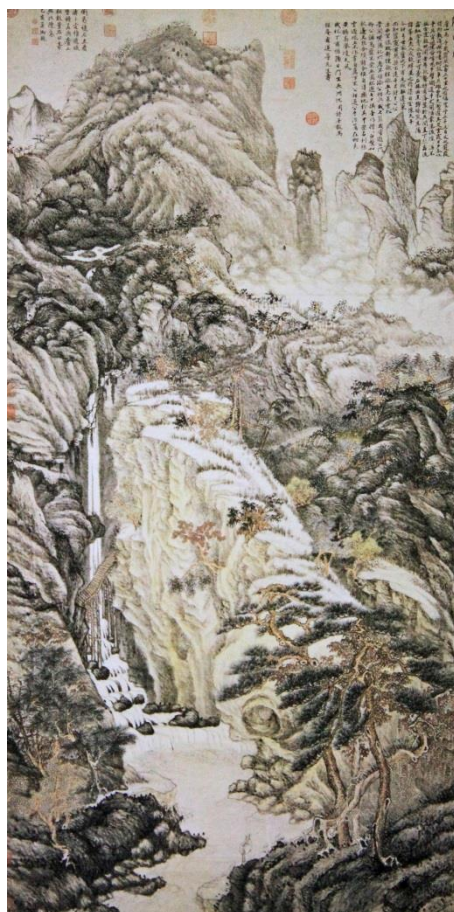
当庭のオーバーハングの石は水墨画由来か



雪舟「山水図」・牧松了菴賛・国宝
出典日本美術絵画全集第四巻雪舟集英社



廬山の五老峰を象徴した石と滝



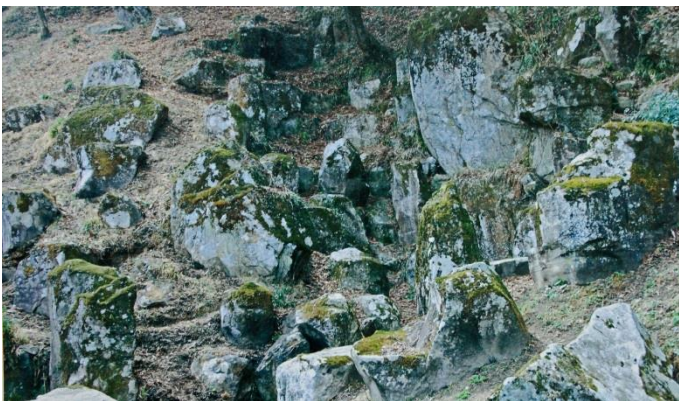
廬山図、沈周画 (1427-1509)

② 久留島家の抽象庭園:ポスト龍安寺庭園として抽象庭園に到達する経過と橋本東三は

聖山を背景とした庭園は基本的には枯山水庭園である。大自然の美しさと拮抗するためには庭園は自然とは正反対の造形でなければ、単なる模倣になってしまう。龍安寺・圓通寺・大徳寺本坊・大通寺の含山軒・桂家庭園の例をみれば明らかと思う。(参照①桂家庭園・②龍安寺)



栖鳳楼庭園の背後には美しい聖山が見える



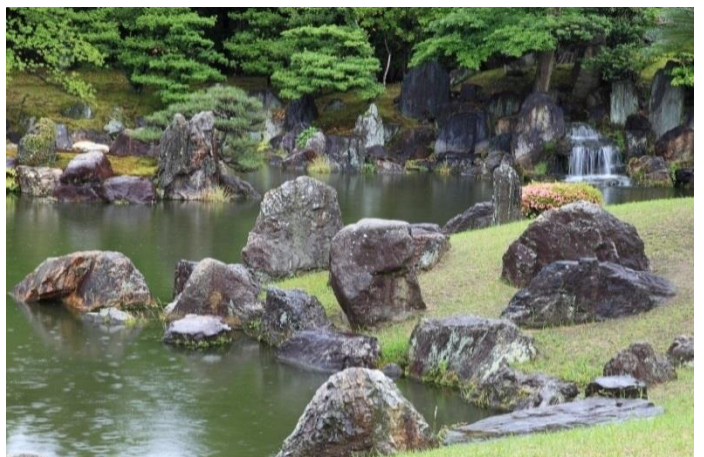
御殿前庭園は国内最大の壮大な枯滝である



周辺の山畔の庭：石垣ではなく分散配石である



圓通寺：分散形配石



二条城：分散形配石



阿波国分寺：分散型配石

久留島家庭園の作者の橋本東三とは

彼は二条城庭園の管理者であった。当然に京都にある円徳院庭園なども研究していたと思われるが、久留島家から庭園の作庭を依頼された彼は近代抽象芸術のような造形を完成させた。

③⑩ 粉河寺(和歌山県紀の川市):驚愕の立体造形美(参照⑥漢陽寺)

- ①立体庭園ともいえる：本堂下の雛壇状に造成された壁面にある擁壁に作られた彫刻的な庭。
- ②作者は謎の集団であり、既存の庭師集団とは異なるのであろうか。
- ③水墨画的感覚と彫刻的感覚の造形は唯一無二の日本庭園だ。



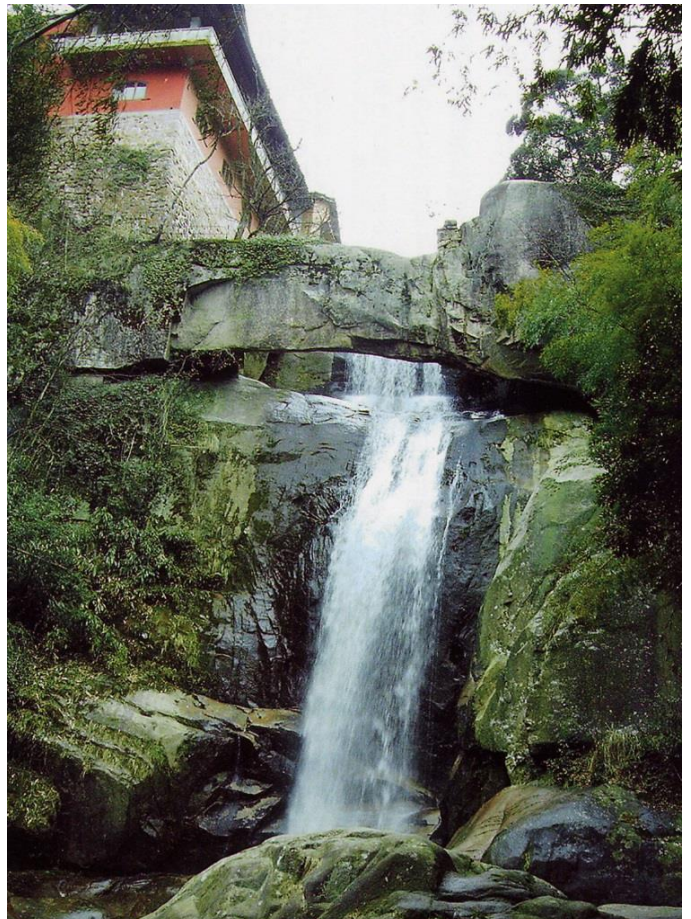
画面外にある本堂への階段の右側にも上記のような庭園がある。直立した石、壁面から突き出る石、乱舞する巨石、壁面の溪谷を流れ落ちる枯滝などダイナミックな庭園この上なし。



渡に渡れないような石橋は正に「石梁瀑布」だ



庭石は壁面から飛び出すようだ



石梁瀑布は天台宗発祥の地の国清寺近くの方広寺に